

小島なお

口語詩句賞新人賞の大野博司さんの作品は、親、自分、子と繋がつてゆく家族という血の共同体をまなざしています。

耐えきれず湖で泣く／母さんが祖母を母さんと／叫んでいる

人が生き続けることに伴う根源的なかなしみは詩の礎だけれど、その根源を見つめながら、作品にはかすかな向日性があり、明るさを信じる心の芯を感じます。

藤谷真実子さんの作品は、この世という大きな布を一枚軽やかにめくつてみせる。

米を研ぐとき／わたしは神につかえている

「神」や「老女」や「脚の長い蜘蛛」はみな等しく作者の世界に君臨して、痛ましく、きらきらしい裏側の世界へ誘うのです。

丸山萌さんの作品は、対象を見つめながら、対象の向こう側に広がる抽象的な世界をも引き寄せてくる作風。砂浜の／読んではならない部分を歩く

ひとつひとつの作品が具象と抽象のあわいを叙情的に行き来するゆりかごのようです。

吉田光里さんの作品は、地上に脚をしつかりと生やし、社会にほの見える狂気の気配に傷つきながら、傷口から発光するような詩。

駅前のゲロを跨いで私たち／これからずっと森で暮らすの

俗物にまみれて生きるしかない私たちは「江戸時代」や「水族館」のような遙かな場所へ憧れつづけるのでしょうか。

山本巧さんの作品は、初春から冬へ、手回しのオルガンのよう一連を四季がゆるやかにめぐつてゆきます。

春に蓋してワセリンの厚くある

季節のなかに自分がいるのではなく、自分の窓枠から季節を眺めるような視点。読者もいつしか同じ窓から外を眺めているような気分にさせてくれる。

西本友亜さんの作品は、言い落した言葉の輪郭がするどく主張しています。その中に続くはずの言葉、故意に省略された言葉は、存在を消されたことでいつそうちかちかと点滅する。

約束は遠くでよろしくやつてある／稻穂と並び揺れてたりする

豊富瑞歩さんの作品は、後半に向かつてスパークする詩の加速に掴まれる。平易な言葉をもちいながら、言葉の取り扱い方に作者ならではの手つきを感じます。

それをする ふつうに泣くよりも／わたしを失わない泣き方がある

読者を、言葉を信じてあるからこそその飛躍。